其處を飛び出した。

ドアを押すと三十人ばかりが、疊の上に坐つて、筆記をしたりして聞いてゐる。

神經質な廣い幅の顏の和服の、たしか島地大等だつたかも知れない。講義をしてゐた。

明治會館の奥の日本間でだ。

僕は立つたまゝドナツた。

『十四日に絶對は有限なりと言ふ講演會がありますから聞きに來て下さい、ダ、の話もあります』

春子を連れて、是非應援演說に來て下さい——

僕は感ずる所があつて、演壇で叫死しようと思ふ——

無想庵と辻潤に僕は書留で手紙を出した。

麴町の警察に六時間ばかり留置された事がある。僕の風體が變だつたので、交番の前を通ると四五人の刑事に包圍されて、僕の持物をスツカリ調べられた。